



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	障害・疾病・不登校などのある児・者を対象にした自尊心・自己肯定感の文献検討(fulltext)
Author(s)	田島,賢侍; 奥住,秀之
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 65(2): 283-302
Issue Date	2014-02-28
URL	http://hdl.handle.net/2309/134674
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

障害・疾病・不登校などのある児・者を対象にした 自尊感情・自己肯定感の文献検討

田 島 賢 侍*・奥 住 秀 之**

発達障害分野

(2013年9月13日受理)

I はじめに

近年、心理学、医学、教育学、特別支援教育学などにおいて、自尊感情や自己肯定感が注目されており、多くの研究が積み重ねられている。本論では、障害・疾病・不登校などのある児・者を対象にした研究から、彼らの自尊感情・自己肯定感の影響要因、自尊感情・自己肯定感を高めるためのアプローチについて調査・整理を行う。

文献の収集については、CiNii、Google Scholarなどのデータベースを中心に、“自尊感情”、“自己肯定感”、“自信”、“障害”、“発達”などをキーワードとして検索し、日本国内で発表された論文60本を対象にした。それらを実践研究論文と総説論文に分け、健常者を対象にした自尊感情・自己肯定感の実践研究論文20本、障害・疾病・不登校などを対象にした実践研究論文18本、自尊感情や自己肯定感に関する総説論文22本と分類した。

なお、自尊感情、自己肯定感、self-esteemなどの用語は統一して使用せず、各論文で使われている用語と同じ用語を本論で使い、整理・検討した。

II 自尊感情・自己肯定感の定義

検討を進めるにあたって、本論文で対象とした論文60本から、自尊感情ならびに自己肯定感の定義を整理しておく。定義について説明のあった論文は14本あり、そのうち3本は2つの定義について触れ、計17個の定義が確認された(Table 1)。「自己愛」に関

する定義は1個、「自尊心」と「self-esteem」に関する定義はそれぞれ2個、「自己肯定感」は4個の定義があり、「自尊感情」は8個の定義があった。全17個の定義に占める割合は、自己愛が5%、自尊心とself-esteemがそれぞれ12%、自己肯定感が24%、自尊感情が47%であり、自己肯定感と自尊感情が半数以上を占めていた。

17個の定義について、使われている用語と定義の対象について整理してみよう。17個の定義のうち、“価値あるもの”や“価値づけ”などといった用語を使っている定義は6個であり(A, D, E, N, P, Q)、“評価”や“自己評価”という用語を使っている定義は2個であった(B, F)。“価値”と“評価”の両方に触れている定義は2個あり(C, J)、自己の“肯定”に触れている定義は3個であった(H, I, O)。以上を整理すると、17個の定義の内13個(76%)が“価値観”、“評価”、“自己の肯定”という用語を含んでいることが明らかになった。一方、定義の対象については、Qが「自己と他者」の両者を対象としているが、その他の16個の定義は全て自分自身を対象としていた。以上より、本論文で対象とした定義の傾向は、“自分自身を対象”とした、“価値的・評価的”な定義であった。

III 健常児・者における自尊感情・自己肯定感の実態 や支援

障害・疾病・不登校などのある児・者を対象にした研究を検討するにあたり、健常児・者を対象にした自

* 東京学芸大学大学院教育学研究科・東京都立城南特別支援学校

** 東京学芸大学特別支援科学講座

Table 1 自尊感情・自己肯定感関連用語17定義

用語	著者	年	定義
A 自己愛	高垣	2006	部分的な能力, 特性によって自分を価値づけ, 満たされるもの
B 自尊心	伊藤	1995	自己についての全般的な感情, 評価, ないし態度
C 自尊心	渡辺	1995	自己の価値に対する評価的感情あるいは自己に対する態度
D Feeling of self-esteem	岩田	2007	自己への評価的な価値に関する心理的な態度や感情
E self-esteem	松本ら	2007	人が自分の自己概念と関連づける個人的価値観及び能力の感覚
F 自己肯定感	和田	2003	自分自身の様々な側面に向けられる自己評価と, それに伴う感情からなる自己意識
G 自己肯定感	高垣	2006	自分が自分であって大丈夫という感覚
H 自己肯定感	久芳ら	2007	自分自信のあり方を概して肯定する気持ち
I 自己肯定感	東京都教職員研修センター	2011	自分に対する評価を行う際に, 自分のよさを肯定的に認める感情
J 自尊感情	伊藤	2007	自己を高く評価できる気持ち。自分自身を基本的に価値ある存在とみなす感覚。
K 自尊感情	金澤	2007	自分はかけがえのない大切な存在であると考え感情
L 社会的自尊感情	近藤	2007	他者との比較で勝っていると感じられたときに高められるもの
M 基本的自尊感情	近藤	2007	他者との比較によって, つまり相対的に優位に立つ経験によって形成される感情ではなく, 絶対的, 無条件に自らの存在を認める感情 基本的自尊感情の上に社会的自尊感情が乗っていることが自尊感情の構造
N 自尊感情	中間	2007	自分で自分を価値あるものとする感覚
O 自尊感情	園田	2007	自分に対する肯定的感情であり, 自分について, それなりの能力と良い面をもった大切な存在とする感覚
P 自尊感情	東京都教職員研修センター	2011	自分のできることでできないことなどすべての要素を包括した意味での『自分』を他者とのかかわり合いを通してかけがえのない存在, 価値ある存在としてとらえる気持ち
Q 自尊感情	西田	2012	自分を価値ある存在であると感じ, 自己と他者を尊重する気持ち

自尊感情・自己肯定感に関する実践研究20本について整理しておこう。Table 2にそれらを整理した。小学生を対象とした研究は7本, 中学生を対象とした研究2本, 高校生対象が2本, 大学生対象が4本, 複数校種・若年者を対象とした研究が5本であった。

(1) 自尊感情ならびに自己肯定感の影響要因

家族, 教師, 友人などとの, 「人とのかかわり」が自尊感情・自己肯定感に影響を与えていると指摘する研究は9本であった(健1, 健2, 健5, 健8, 健10, 健13, 健16, 健18, 健20)。小学生から中学生にかけて自己肯定感と人とのかかわりは強くなるが, 高校生になるとその影響は小さくなるという指摘や(健16), 中学生男子においては, 友人に対する気づかいと自己肯定感に関係があるとの指摘(健8), 教師からの評価や声掛けが自尊感情に影響しているとする報告がある(健18)。高校生における家族, 教師, 友人とのかかわりが自己肯定感と関係があるとの指摘や(健10), 高校生男子と高校1年生においては, 家

族とのかかわりが自己肯定感に負の影響を及ぼしているとの指摘があり, 精神的にも物理的にも家族から自立することを望む時期に家族とのかかわりが強すぎることは, 自己肯定感の低下を導くことを示唆している(健16)。また, 自尊心の高い者は友人・知人との関わりで長所に多く気づき, 自尊心の低い者は短所を多く気にするという報告がある(健13)。

社会的性意識, 同性保護者に対する評価などの「性受容」と自己肯定感の関係を指摘している研究は4本であった(健3, 健9, 健11, 健15)。小学生の性受容は, 男女ともに自己肯定感に影響し(健3), 高校生では女子のみにおいて, 全ての性受容因子が自己肯定感に影響している(健11)。中学生の性受容の特徴は, 小学生と高校生の中間に位置する特徴であると報告している(健9)。一方, 大学生においては男子のみが全ての性受容因子が自己肯定感に影響すると指摘されている(健15)。

「身体的意識」が影響を及ぼしているとする研究は4本確認された(健5, 健9, 健11, 健14)。中学生

および高校生男子の身体的意識と自己肯定感に関係があるとの指摘や(健9, 健11), 身体的自己概念と自尊感情が相互に影響し合っているとの指摘がある(健14)。

「学業」との関連については2本がその影響を指摘し、学業が人とかかわりにおける自己評価を高めるとする報告や(健18), 小学女子では学年が上がることで自尊感情が低下し、それに伴い学習意欲も低下するという指摘がある(健5)。

「進路意識」については2本が指摘しており、進路選択に向き合うことで自分自身と向き合い、自己を確立する機会となっているとの指摘や(健16), 進路意識が自己主張に影響を与えているとの報告がある(健18)。

その他の影響要因としては、「集団への所属」から生まれる自尊心である集団自尊心の高さが所属集団への高い評価につながるとの報告(健12), 「悲哀感情」と自己肯定感に放置と代理補償の関連があることの示唆(健17), 自尊感情と「不登校」との関係の指摘(健18), 「親の自尊感情」と子どもの自尊感情の関連の指摘が確認された(健19)。

以上より、学齢期に当たる小学生から大学生を対象とした研究では、「人とかかわり」, 「性受容」, 「身体的意識」, 「学業」, 「進路意識」が複数研究において指摘され, 「集団への所属」, 「悲哀感情」, 「不登校」, 「親の自尊感情」を加えた9要因が整理された。一方, 若年者・就業者の自尊感情については, 「同居している家族形態」, 「就労状況・収入」, 「学生時代の状況」が自尊感情に影響を与えていることが指摘された(健20)。

(2) 自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチ

自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチを指摘する研究は3本であった(健1, 健6, 健7)。「支持的な学級づくり」を通じた, 遊びの活性化を通じたコミュニケーション能力の育成と, 人間関係の育成が小学生の自尊感情を高めるとの指摘や(健1), 「PDCAサイクルによる指導」が自尊感情や自己肯定感を高めるとの指摘(健6)。「客観的な学級経営評価」のため, 教員の学級経営チェックリストや児童の自己評価による意識調査などの指標の活用が有効とする報告(健7)。学級担任が「保護者と連携」しながら学級経営を行うことの重要性も指摘されている(健7)。

以上より, 「支援的な学級づくりを通じた人間関係の育成」, 「PDCAサイクルによる指導」, 「客観的な学級経営評価」, 「保護者との連携」の4点が有効なアプ

プローチであると整理した。

(3) 自尊感情・自己肯定感の学校・学年段階の変化

年齢・発達段階における自尊感情・自己肯定感の推移については, 小学生から学年が上がるにつれ自尊感情・自己肯定感が低下するという報告があるが(健2, 健4), 進路選択を通して自分自身と向き合い, 自己を確立する時期である中学3年生と高校3年生においては自己肯定感の下げ止まり・若干の上昇傾向があるとの報告がある(健16)。

(4) 小括

健常者の自尊感情・自己肯定感の影響要因は20本中17本で指摘されていた(健1, 健2, 健3, 健5, 健8, 健9, 健10, 健11, 健12, 健13, 健14, 健15, 健16, 健17, 健18, 健19, 健20)。一方, 自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチに関しては20本中3本で指摘されるに留まった(健1, 健6, 健7)。影響要因を扱った研究の方が, 自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチを扱った研究よりも多いことが明らかになった。

IV 障害・疾病・不登校などのある児・者の自尊感情・自己肯定感の実態や支援

障害・疾病・不登校などのある児・者を対象にした自尊感情・自己肯定感に関する研究18本について検討する。実践研究18本の内, 通常学校における実践研究は7本, 特別支援学校における研究は4本, 福祉施設における研究は3本, 疾病のある成人を対象とした研究は4本であった(表3)。

(1) 自尊感情・自己肯定感の影響要因と障害・疾病との関係

「学業」が影響していると指摘する研究は4本であった(障1, 障3, 障7, 障8)。昼夜間定時制高校において, 学業での適応が人間関係に影響を与え, 学校適応に影響しているとの指摘や(障7), 肢体不自由特別支援学校においては, 学習の理解度が児童の自尊感情・自己肯定感に影響しているという報告がある(障8)。

「人とかかわり」については, 5本の研究が影響を指摘していた(障1, 障7, 障8, 障11, 障18)。小学校におけるADHD傾向の高い児童を対象にした研究では, 友だち関係において自己評価が低いと報告している(障1)。定時制高校において, 中学校で不

Table 2 健常者の自尊感情・自己肯定感研究 (20論文)

著者	年	目的	対象	方法	主たる結果	
小学生						
健1	吉田	2004	遊びの活性化、コミュニケーション能力の育成、支持的な学級づくりと自尊感情の関係を検討	小学校の4年生11名、5年生11名と統制群(3校)の4年生94名と5年生110名	Rosenberg自尊感情尺度、井上信子の児童用自尊心尺度	<ul style="list-style-type: none"> 非対象校との比較より、対象校の自尊感情得点が明らかに伸びており、遊びの活性化、コミュニケーション能力の育成、支持的な学級づくりの介入が自尊感情を高めると推察。 自尊感情を高めるためには人間関係の育成が非常に重要であることが示唆。
健2	久芳ら	2006	小学生を対象とした、自己肯定感と友達・家族・教師とのかかわりの関連を検討	東京都の公立小学校(9校)の小学生(小4～小6)1670名(男874名、女796名)	田研式「親子関係診断テスト」、高等学校「倫理」「現代社会」研究会(1993)を参考にした、友人とのかかわり尺度、家族とのかかわり尺度、教師とのかかわり尺度、自己評価尺度	<ul style="list-style-type: none"> 小学生の時点では性別による自己肯定感の差はあまりみられない。 学年とともに自己肯定感の低下が見られた。 自己肯定感の高い方が有意に人とのかかわりをもっていた。自己肯定感が高いことで人とのかかわりが良好になり、それゆえに自己肯定感が高くなることが示唆された。
健3	久芳ら	2009	自己肯定感と性受容、および社会的性意識、母親/父親像の関連について検討	東京都の公立小学校6校の小学生(小4～小6)1192名(男598名、女594名)	自己肯定感尺度(久芳ら, 2005)、性受容尺度、社会的性意識尺度、母親像・父親像尺度(久芳ら, 2007)	<ul style="list-style-type: none"> 男女ともに、性を受容できていることが自己肯定感の高さに影響を及ぼしていた。 女子においては、社会的性意識および母親像へのポジティブな評価が強いことが自己肯定感を高めていた。
健4	清水ら	2009	小学校高学年の学習意欲と心理学的要因、対人関係要因、学校生活要因、家庭生活要因の関係を検討	小学校5校の5年生82名(男45名、女37名)、6年生86名(男44名、女42名)計168名	「学びの意欲アセスメント尺度」(橘川, 2006)、Rosenberg自尊感情尺度、「小学生の無気力感尺度」(笠井ら, 1995)、「中学生用学校適応感尺度」(橘川ら, 2005)、「学校生活に関する尺度」(橘川・高野, 2007)、「中学生用学習習慣質問紙」(松岡ら, 2002)、「中学生用の生活習慣質問紙」(岡部, 2002)	<ul style="list-style-type: none"> 自尊感情が学習意欲全体に対して強く影響を及ぼすことを示唆。 自尊感情を高めていくことで子どもたちの学習意欲の向上に繋がっていく。女子は学年が上がると自尊感情が急激に低下し、それに伴い学習意欲も低下するので、自尊感情の低下が大きく影響していると考えられる。 友人関係や親子関係と比べ教師との関係がよいかということの方が、学習意欲に影響が大きい。
健5	中山ら	2011	「子ども用5領域自尊心尺度」をもとに、小学生に適用可能な領域別の自尊感情尺度の作成	新潟県上越市立南本町小学校の小学生(小1～小6)1,457名	「子ども用5領域自尊心尺度」の全データを1学期(7月)、2学期(12月)、3学期(2月)の3回実施	<ul style="list-style-type: none"> 小学生段階の児童が「学習」「社会」「運動」「家族」それぞれの領域における自尊感情をよく弁別して認知していることが確認され、小学生に対してこれらの領域別の自尊感情を測定する可能性を示唆。
健6	東京都教職員研修センター	2011	年齢による発達段階毎の指導上の留意点・実践事例の検討	東京都公立小学校5・6年生133名	自尊感情測定尺度(東京都教職員研修センター, 2011)	<ul style="list-style-type: none"> 自尊感情のタイプには6タイプあり、Iタイプ11.3%、IIタイプ22.6%、IIIタイプ10.5%、IVタイプ32.3%、Vタイプ10.5%、VIタイプ12.8%とタイプの結果はちらばっている。 自尊感情や自己肯定感を高めることを意識した指導のPDCAサイクルが有効。
健7	西田	2012	自尊感情という視点から学級経営を中心とした学校教育について検討	小学校4年生29名(男16人、女13人)	自尊感情テスト、他者肯定感・否定感テスト(福岡県教育センター, 2004)、対象学級の経年変化(小3～4年)、「学級経営チェックリスト」	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの自尊感情を育む学級経営には、教師が学級経営チェックリストのような評価規準と児童意識調査など客観的な指標とを比較検討することが大切。 学級担任が保護者と連携しながら、自尊感情に着目した学級経営を行うことで、子どもの自尊感情を育むことができる。

中学生						
健8	久芳ら	2005	中学生を対象とし、自己肯定感と友人・家族・教師とのかかわりの関連を検討	東京都の公立中学校6校の中学生(中1~中3)2506名(男1338名, 女1168名)	田研式「親子関係診断テスト」、高等学校「倫理」「現代社会」研究会(1993)を参考にした、友人とのかかわり尺度、家族とのかかわり尺度、教師とのかかわり尺度、自己評価尺度	<ul style="list-style-type: none"> 自己肯定感の高い方が対人関係が良好であるという、自己肯定感と人とのかかわりとの密接な関係が明らかになった。 中学生男子の友だちへの気づかいは、自己肯定感との間に正の相関があり、女子の場合は負の相関がみられた。
健9	久芳ら	2011	中学生男女を対象とし、自己肯定感と性受容、社会的性意識、母親/父親像の関連について検証	公立2校、国立1校、私立1校の中学生、およびガールスカウトに所属する中学生女子、計1799名(男860名, 女939名)	自己肯定感尺度(久芳ら, 2005)、性受容尺度、社会的性意識尺度、母親像・父親像尺度(久芳ら, 2007)	<ul style="list-style-type: none"> 男子の「身体的劣等感」は自己肯定感に負の影響を及ぼし、女子においては、すべての性受容因子が自己肯定感に影響を及ぼしていた。 男女それぞれにおいて、小学生、高校生の結果の中間に位置する特徴をもっていると推測され、発達の变化的様相を示唆するものであった。
高校生						
健10	久芳ら	2004	高校生の自己肯定感と家族や友人、教師とのかかわりの関係を検討	都立及び県立高校の高校生(高1~高3)1245名(男601名 女644名)	「自己評価」「友人とのかかわり」「家族とのかかわり」「教師とのかかわり」(久芳ら, 2004)	<ul style="list-style-type: none"> 「今の自分が好きだ」と自己肯定できる者は、自己評価も肯定的であり、家族・教師・友人等のかかわりもよい。 自己肯定感のない者は友人に合わせるなど気を使い、特に男子では、自分から話しかけたり、異性と気軽に話すことができない。
健11	久芳ら	2010	高校生男女を対象とし、自己肯定感と性受容、社会的性意識、母親/父親像の関連について検証	東京都の公立・国立高校3校の高校生(高1~高3)1227名(男523名, 女704名)	自己肯定感尺度(久芳ら, 2005)、性受容尺度、社会的性意識尺度、母親像・父親像尺度(久芳ら, 2007)	<ul style="list-style-type: none"> 女子においては、すべての性受容因子が自己肯定感に影響を及ぼしていることが確認されたが、男子においては、「身体的満足」のみという結果であった。 男子においては性受容、社会的性意識および父親像が自己肯定感に与える影響はあまり大きくないということが明らかになった。
大学生						
健12	渡辺	1995	集団自尊心を測定するための日本語版尺度の作成	静岡県立大学299名、武蔵大学48名計347名(男90名, 女251名, 不明6名)	Luhtanen & Crocker (1992)の集団自尊心尺度の日本語版	<ul style="list-style-type: none"> 集団自尊心の高い者のほうが自大学への所属によって高い自尊心を獲得していることが示された。これらの結果は、集団自尊心尺度が、集団への所属から生まれる自尊心の高さを予測する尺度として妥当であることを指摘。
健13	北村	1998	自己の長所、短所が対人認知過程に対していかに影響するかの検討	女子大学生39名	好きな、嫌いな友人・知人それぞれの性格について5-7個の記述を行い、1週間後、自己の長所・短所について各5つずつ挙げ、Rosenberg自尊感情尺度を実施	<ul style="list-style-type: none"> 他者認知において、長所次元が短所次元よりもよく用いられること、自尊心の低い被験者は自尊心が中程度、あるいは高い被験者よりも友人・知人の短所が気になる、つまり短所次元を多く用いる傾向があることが示唆。
健14	養内	2010	自尊感情と身体的自己概念の関係性について、ボトムアップ型とトップダウン型の有効性の検討と比較	大学生626名(男301名, 女325名)	Rosenberg自尊感情尺度、身体的自己概念尺度(養内, 2002)	<ul style="list-style-type: none"> ボトムアップ型(身体的自己概念から自尊感情)とトップダウン型(その逆)両者のモデルとも有効であり、トップダウン型のモデルの方が、ボトムアップ型のモデルと比較して、影響力が強いことが分かった。 自尊感情と自己概念の関係は、一方的な影響ではなく、両方向で影響し合うことが示唆。
健15	久芳ら	2012	大学生男女を対象とし、自己肯定感と性受容、社会的性意識、母親/父親像の関連について検証	東京および埼玉の私立大学5校の大学生1015名(男501名, 女514名)	自己肯定感尺度(久芳ら, 2005)、性受容尺度、社会的性意識尺度、母親像・父親像尺度(久芳ら, 2007)	<ul style="list-style-type: none"> 女子においては、「中核的・満足」のみが自己肯定感に影響を及ぼし、男子においては、すべての性受容因子が自己肯定感に影響しているという結果となった。

複数校種対象・若年者

健16	久芳ら	2007	小・中学生、高校生を対象に自己肯定感の性差、学年差、自己肯定感を規定する人とのかかわりの要因を検討	東京都の公立小学校9校の小学生(小4～小6) 1670名、公立中学校6校の中学生(中1～中3) 2506名、公立高校2校の高校生(高1～高3) 1258名、計5434名	田研式「親子関係診断テスト」、高等学校「倫理」「現代社会」研究会(1993)を参考にした、友人とのかかわり尺度、家族とのかかわり尺度、教師とのかかわり尺度、自己評価尺度	<ul style="list-style-type: none"> ・中3と高3において自己肯定感の下げ止まり、もしくは若干の上昇傾向があり、進路選択に向き合うことで自分自身と向き合い、自己を確立する機会になっていることが自己肯定感に影響を及ぼしている可能性を推察。 ・高校男子と高1女子において、家族とのかかわりが強すぎることは、自己肯定感を低下する結果となった。
健17	高坂	2009	青年が容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情と反応行動との関連を検討	中学生207名(男93名、女114名)、高校1・2年生188名(男60名、女128名)、大学生150名(男60名、女90名)	劣性認知項目、感情項目、反応行動項目(高坂)	<ul style="list-style-type: none"> ・悲哀感情は、自分ではどうすることもできない容姿・容貌を放置し、他の領域で努力しようとする感情であり、自己肯定感情はすでに自身の容姿・容貌に満足しているため、他の領域へ働きかけようとしている感情であると考えられ、悲哀感情と自己肯定感情は、ともに放置と代理補償の関連が示唆される。
健18	伊藤	2011a	自尊感情のタイプにより、学校適応や成長に関する変数がどのように異なるのかを検討	東京都の公立小学校11校の5・6年生1311名、中学校5校の中学生(中1～中3) 1144名、高校3校の高校生(高1～高3) 1564名、計4019名	東京都版自尊感情尺度(東京都教職員研修センター, 2009)、「学校環境適応感」尺度(内藤ら, 1987)、個人志向性・社会志向性PN尺度(伊藤, 1998)、親子関係に関する尺度(Symonds, 1939, 鈴木ら, 1985)	<ul style="list-style-type: none"> ・月に1日程度の欠席者は、休みがない群に比べると自尊感情得点が低く、自尊感情と不登校の関連を示唆。 ・「自己評価・受容」は教師からの評価や声掛けにより高められ、「関係の中での自己」は学業や友人関係との関連が、「自己主張・決定」は進路意識に影響を受けることが示唆。
健19	伊藤	2011b	子どもと親のマッチングデータから、親の自尊感情と子どもの自尊感情の関連について検討	東京都の小学校児童と幼稚園児、その保護者	自尊感情尺度(子ども用)、自尊感情尺度(子ども向けと同じ内容で保護者自身について)、親子関係に関する尺度(Symonds, 1939, 鈴木ら, 1985)、子どもの行動面についての評定(伊藤ら, 2010)	<ul style="list-style-type: none"> ・親の自尊感情が高いほど、子どもの意欲や自信に対して高く評価していて、子どもに対する自信が親としての自信につながっていることが示唆。 ・子どもの自尊感情は親の自尊感情とそれほど強い関連を持たないという結果であったが、「自己評価・自己受容」、「自己主張・決定」については、親の自尊感情が高いほど子どもの自尊感情も高かった。
健20	下村	2011	若年者の自尊感情に関する知見を提示し、自尊感情等に配慮したキャリアガイダンスに向けた政策的な論点を提出すること	23～27歳までの若年就労者等5,576名(正規就労者・非正規就労者・求職者・無業者・専業主婦を含む)	Rosenberg自尊感情尺度、各種質問項目	<ul style="list-style-type: none"> ・家族形態と自尊感情の関わりでは、「配偶者のみ」が自尊感情がもっとも高く、「配偶者と子ども」、「本人のみ」、「親と同居」の順に自尊感情が低くなった。 ・非正規就労または無業の状態にある若者で自尊感情が低かった。 ・若年就労者等の自尊感情は、現在の収入・勤務先の規模と関連し、収入が高いほど、勤務先の規模が大きいほど、自尊感情は高かった。 ・中学時代の学業成績が良かったほど、また、学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っているほど、自尊感情は高かった。

登校を経験した者は、コミュニケーションの苦手や強い対人不安を感じる者が多く、その特性は高校入学後も持続するという指摘や、中学校時代に完全欠席していた生徒は人間関係の苦手意識に加え、抑うつ感のような精神的ダメージを抱えている者も多いという指摘がある(障7)。肢体不自由特別支援学校においては、担任と友だちとのかかわりが自尊感情・自己肯定感に影響し(障8)、人とのかかわりに関する自己評価も高いとの結果がある(障11)。統合失調症患者では対

人関係の不安が、自尊感情に影響しているとの指摘がある(障18)。

「日常生活動作・技能」との影響を指摘する研究は4本であった(障8, 障15, 障16, 障18)。肢体不自由特別支援学校の児童の日常生活充実度が自尊感情・自己肯定感に影響するという研究(障8)。統合失調症の患者を対象とした研究では、「社会生活技能」テスト(身だしなみ, 社会生活資源の利用, コミュニケーションスキル, 生活環境の整備の4観点の調査)

の得点が高いと自尊感情も高くなると報告しているが、高い自尊感情が社会生活技能を高めるわけではないとも報告している(障18)。病院で理学療法を受けた患者を対象とした研究では、ADL能力とself-esteem自尊感情との間に関連があるとし、重度のADL障害が生じた四肢体幹障害者のself-esteemが患者群の中で最も低いと報告している(障16)。一方、脳血管障害患者とパーキンソン病患者を対象とした研究では、ADLや機能障害とself-esteemとの関係は認められなかったとの報告もある(障15)。

「障害・疾病を原因とする状態」が自尊感情・自己肯定感に影響すると指摘する研究は6本あった(障4, 障6, 障7, 障12, 障13, 障18)。軽度知的障害があり、ADHDと反抗挑戦性障害と診断された児童の研究では、情緒の状態が安定することで適応行動が増えたことが指摘されている(障12)。少年院の入院時におけるAD/HD-YSRの不注意得点と自尊感情に負の相関があるという指摘や(健13)、統合失調症の患者の病的体験は自尊感情の低さと関係があるという指摘もある(障18)。不登校経験者は人間関係の苦手意識があり(障7)、特別支援学校における知的障害・広汎性発達障害を対象とした調査においては、自尊感情得点が高い傾向を示したことについて、自己認知の発達の遅れや偏向があることが原因であるとの推察もある(障4)。

その他の影響要因として指摘されたものでは、定時制高校における調査において、「進路意識」や高校に対してどのような動機を持っていたかが、その後の学校適応や自尊感情に影響するとの指摘や(障7)、「虐待やいじめ」が原因で自尊感情が低くなるとの報告(障2)、小学校高学年に在籍するADHD児では「容姿の自己評価」が自尊感情に影響を与えているとの指摘がある(障3)。

以上より、障害・疾病・不登校者を対象とした研究において、「学業」、「人とのかかわり」、「日常生活動作・技能」、「障害・疾病を原因とする状態」が自尊感情・自己肯定感に影響を与えている要因だと複数の研究が指摘し、「進路意識」、「虐待やいじめ」、「容姿の自己評価」を加えた7要因が整理された。

(2) 自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチ

「担任の障害理解・支援」については5本(障5, 障6, 障7, 障10, 障11)が指摘している。教師の受容的なかかわりで自己評価が高まるという報告や(障7)、教師の自閉症理解がクラスの障害理解へと繋がりが、クラス集団の中で自閉症児の居場所ができたとの

報告がある(障5)。教員間で支援内容や指導記録を共有し、問題行動を予防する取り組みが有効であったとの指摘や(障6)、一人の生徒に対して教員同士でアイデアを出し合うミーティングが必要であったとの指摘もある(障10)。また指導方法として、苦手な面の配慮と得意な面を伸ばすかかわりにより、生徒が前向きに学校生活を送れるようになったという報告や(障10)、児童の実態に合った教育課程や教育内容が自尊感情を高めると示唆する研究もある(障11)。

「社会生活能力・リハビリテーションの向上」については3本が指摘している(障15, 障16, 障18)。脳血管障害患者に対して、積極的なリハビリテーションの介入がself-esteemに重要との指摘(障15)がある一方、ADL障害の自己評価の回復にはADLの改善だけでは不十分とも指摘している(障16)。統合失調症患者のケースでは、高い社会生活技能は自尊感情の高さを規定することを指摘している(障18)。

「良好な人とのかかわり」については3本が指摘している(障1, 障11, 障14)。肢体不自由特別支援学校においては、在籍児童生徒数の少なさから、良好な交友関係を保障することが必要だとの指摘(障11)。更生保護施設においては、療育者の受容的なかかわりが自己肯定感を高め、自己の存在を認めることにつながるとの指摘(障14)。小学校におけるADHD傾向の児童に対しては、友だち関係の自己評価が低いことから、SSTを用いたトレーニングが有効であるという指摘もある(障1)。

「保護者へのアプローチ」が有効であるとする研究は2本あり(障1, 障2)、ADHD児を持つ親のための訓練プログラムによる親の自信回復が子どもに影響をするとの指摘や(障1)、虐待やいじめのケースにおいては、保護者の養育態度を踏まえた介入が必要との指摘がある(障2)。

「適切な教員配置」については2本が指摘しており(障4, 障11)、特別支援学校の複数の教員配置が子どものニーズに適した指導につながっているとの指摘であった(障4, 障11)。

その他の自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチとしては、「学習の場の変化」について、中学校から肢体不自由特別支援学校高等部に進学したことにより、自己肯定感を感じられるようになったという報告(障9)。「自分自身の障害理解」について、ADHDと反抗挑戦性障害のある子どもの場合では、行動観察による自己の評価・フィードバックをすることにより、子ども自身が自分の状態を客観的に振り返ることができ、自己肯定感を高めることができたとの指摘もある

(障12)。

以上より、自尊感情・自己肯定感を高めるためのアプローチとして、「担任の障害理解・支援」、「社会生活能力向上・リハビリテーション」、「良好な人とのかわり」、「保護者へのアプローチ」、「適切な教員配置」について複数研究が指摘し、その他「学習の場の変化」と「自分自身の障害理解」を加えた7要因が整理された。

(3) 障害・疾病別の特徴

各障害・疾病について、自尊感情・自己肯定感の特徴とそれらを高めるアプローチについてまとめてみよう。

ADHDに関連する研究は4本であり、小学校における研究が2本(障1, 障3)、福祉施設での研究が2本である(障12, 障13)。ADHD傾向の高い児童は、健常児と比べると自尊感情の得点が全般的に有意に低く(障1)、学業の自己評価も低い(障1, 障3)。加えて、家族と友だち関係においても得点が低い(障1)、自身の能力や適性などが自尊感情に与える影響は限定的である(障3)。自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチとしては、本人の行動のフィードバック(障12)、SSTによる友人関係の改善と保護者への親訓練プログラムが有効である(障1)。

疾病のある者を対象とする論文は4本である(障15, 障16, 障17, 障18)。ADL障害が重度であるほどself-esteemが低いとの報告(障16)がある一方、脳血管障害患者とパーキンソン病患者の場合ADLや機能障害とself-esteemとの関係は認められなかったとする報告もあり(障15)、知見の一致が十分見られているわけではない。統合失調症患者の場合は、病的経験や対人関係の不安から自尊感情が低くなると指摘している(障18)。自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチとしては、統合失調症の場合は、社会生活技能の改善が有効であるとしている(障18)。ADL障害の場合では、ADL障害は自己評価を低下させるが、低下した自己評価の回復にはADLの改善だけでは不十分であるとの指摘がある(障16)。

不登校・不適応傾向児に対する研究は3本あり(障6, 障7, 障14)、通常学校における研究が2本(障6, 障7)、更生保護施設における研究が1本である(障14)。公立中学校において、教員による評価により支援が必要として名前が挙がった生徒の自尊感情は、一般群の比較よりも低い傾向にあるとの指摘がある(障6)。更生保護施設においては、受容される体験を通じて自己肯定感と自己効力感を高め、自己の存

在を認めることができたとの指摘がある(障14)。昼夜間定時制高校において学校適応が良好な生徒の自尊感情の傾向として、自己評価的な側面には良好な教師との関係が、人間関係に関する側面には友人関係や学業での適応が、自己決定や自己主張については進路意識の強さが影響すると指摘している。また、中学校時代に休まず登校していた生徒は、高校入学後も比較的良好に登校しているが、中学時代不登校経験者は、コミュニケーションの苦手や強い対人不安を感じる者が多く、高校入学後もその特性を引きずっていることが示唆されている。加えて、中学校時代に完全欠席していた生徒は、人間関係の苦手意識に加え、抑うつ感のような精神的ダメージを伴う者も多いため、心理的・精神的ケアが必要であるという指摘もある(障7)。

肢体不自由児を対象とした研究は3本ある(障8, 障9, 障11)。学習の理解度、日常生活の充実度、そして人とのかわりが自尊感情・自己肯定感に影響を及ぼしているという指摘や(障8)、肢体不自由児の自尊感情測定尺度の得点は健常児の平均値よりも高く、特に人とのかわりの分野で高いことが報告されている(障11)。肢体不自由児の自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチとしては、友人・教員との良好な交友関係の保障、子どものニーズに合った教育課程や教育内容が指摘され(障11)、通常学校に在籍している肢体不自由児の場合では、肢体不自由特別支援学校への転校も有効な手段であると指摘している(障9)。

広汎性発達障害を対象とした研究は1本あり(障4)、通常学級における広汎性発達障害の自尊感情は、一般群と比較すると低かった。一方、教師の評価により広汎性発達障害の疑いがあるとする群では、人との関係と自己主張・自己決定の2項目において、一般群より有意に低かった。特別支援学校における知的障害・広汎性発達障害群は、一般群と比べて自尊感情高い傾向であり、複数の教員配置による充実した人とのかわりと自己認知の発達の遅れや偏向が理由であることを示唆している。

LDを対象とした研究は1本あり(障10)、教員の個別対応、得意なことを生かす指導、教員間の共通認識のための指導内容表の作成、当該生徒の対する教員間のミーティングが、自尊感情を高めるために重要であると指摘している。

高機能自閉症を対象とした研究は1本あり(障5)、担任が高機能自閉症児を理解し、担任の理解からクラスの子どもが高機能自閉症児の特異な身体生理的特徴を理解することで、クラス集団に高機能自閉症児の居

場所ができ、子ども同士がつながる経験をもて、高機能自閉症児が自己肯定感をもてる雰囲気をつくることのできたと報告している。

虐待・いじめを対象とした研究は1本あり(障2)、対象児とのかかわり方について、絵画などの非言語ツールなどから徐々に対象児の気持ちに接近して、自尊感情の回復に寄り添う支援が必要とし、保護者の養育態度や子どもの環境を含む環境整備が重要であると指摘している。

(4) 小括

研究対象としては、ADHDが4本(22%)、疾病に対する研究が4本(22%)、不登校・不適応傾向児に対する研究が3本(16%)、肢体不自由児を対象とした研究が3本(16%)、広汎性発達障害が1本(6%)、LDが1本(6%)、高機能自閉症が1本(6%)、虐待・いじめが1本(6%)であり、ADHD、疾病、不登校・不適応、肢体不自由が大半を占めており、視覚障害、聴覚障害、知的障害を単独で対象とした研究は筆者の調べる限りでは見当たらなかった。

調査場所としては、通常学校が7本(39%)、特別支援学校における研究4本(22%)、疾患(病院)における研究4本(22%)、福祉施設における研究3本(17%)であった。

自尊感情・自己肯定感の影響要因については、18

本中13本が指摘しており、72%の研究が指摘、検討していた(障1、障2、障3、障4、障6、障7、障8、障11、障12、障13、障15、障16、障18)。一方、自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチについても、14本が指摘しており、78%の研究が指摘していた(障1、障2、障4、障5、障6、障7、障9、障10、障11、障12、障14、障15、障16、障18)。これより、障害・疾病・不登校などを対象とした研究では、影響要因の特定と同時に、自尊感情・自己肯定感を高めるためのアプローチについての研究が多くなされていることが明らかになった。

また今回の調査において、経年調査を実施した研究は2本のみであり(障5と障13)、障害・疾病・不登校などを対象とした長期にわたる研究が必要である。

V 障害・疾病・不登校などと自尊感情や自己肯定感に関する総説論文

以上、自尊感情・自己肯定感の年齢変化、及び障害・疾病を対象とした論文を概観したが、これをテーマとする総説論文が22本ある。この内容を整理し、上で行った整理の結果と対照させてみよう。幼児を対象とした論文が2本(9%)、小学生を対象とした論文は5本(23%)、小学生・中学生・高校生全般を対象とした論文は12本(54%)、障害・疾病を対象とし

Table 3 障害・疾病・不登校などを対象にした自尊感情・自己肯定感研究(18論文)

著者	年	目的	対象	方法	主たる結果	
----- 通常学校 -----						
障1	松本ら	2007	小学生のADHD傾向の高い児童の自尊感情の様相と、自己評価を低下させている要因を検討	学級担任の評価によるADHDサスペクト43名(全対象の約36%)と非サスペクト1152名	ADHDRS-IVJ学校版(学級担任の評価で使用)、子ども用5領域自尊心尺度(ホープ, 1992)	・ADHDサスペクト群が非サスペクト群に比べ、自尊感情の合計得点が有意に低く、下位尺度「学業」「家族」「友だち」において有意に得点が低く、「身体イメージ」「願望」においては有意な差はなかった。 ・サスペクト群の親にはADHD児の親訓練プログラムによる親の自信度の回復、子どもには友だち関係において自己評価が低いためSSTが必要。
障2	石川	2007	虐待・いじめを受けた児童への援助を振り返り、自尊感情の回復に必要な視点を検討	5年生女子(入学時から場面完黙で3年より不登校)といじめをうけていた4年生男子	相談室に勤務していた筆者の面接記録	・虐待やいじめで自尊感情が傷ついた子どもの援助には、保護者の養育態度や子どもの環境を含む視点が必要。 ・虐待やいじめなどの問題への対応は、絵画などの非言語ツールから徐々に接近し、開示を強要せず、粛々と自尊感情の回復に寄り添うことが必要。
障3	中山ら	2008	小学校高学年におけるAD/HD児の自己評価と自尊感情を定型発達児との比較から明らかにする	AD/HD診断を受けた45名(4年生22名、5年生14名、6年生9名)、定型発達児198名(4年生73名、5年生72名、6年生53名)	Tanaka et al. (2005)を参照にした自己評価尺度・自尊感情尺度	・AD/HD児では、容貌と学業の自己評価が自尊感情に影響を与えていた。一方、定型発達児では、運動を除く全領域の自己評価が自尊感情に影響しており、AD/HD児では自身の能力や適性などが自尊感情に与える影響はごく一部である可能性が示唆。

障4	古賀	2011	学校での不適応傾向のある児童生徒の自尊感情傾向を明らかにする	都内の小学校2校(小1～6)1057名, 中学校2校(中1～3)889名, 高校1校(高1)240名, 特別支援学校1校51名, 計2237名 対象児童生徒の担任教師65名	東京都版自尊感情尺度(伊藤ら, 2010), 教師のチェックリスト	<ul style="list-style-type: none"> ・通常級における広汎性発達障害群は自尊感情3得点(「自己評価・受容」, 「関係の中での自己」, 「自己主張・決定」)全てに低い傾向。広汎性発達障害ではないが教師の評価により抽出された群は「他者との関係」と「自己主張・自己決定」において一般群より有意に低い傾向を示した。 ・特別支援学校の知的障害・広汎性発達障害群は, 自尊感情3得点全てにおいて高い傾向を示した。複数の教員配置による行き届く環境であること, 自己認知の発達の遅れや偏向があることが理由であると示唆。
障5	越野	2011	通常学級における高機能自閉症児が自己肯定感をもつに至るプロセスの検討	中学校の通常学級に在籍する高機能自閉症児	著者(スクールカウンセラー)から見た, クラス集団と高機能自閉症児との関係を記述	<ul style="list-style-type: none"> ・担任が高機能自閉症児を理解し, 担任の理解からクラスの子どもが高機能自閉症児を理解し, クラス集団に高機能自閉症児の居場所ができ(子ども同士がつながる経験), 高機能自閉症児が自己肯定感をもてるようになるというステップが確認された。
障6	鶴岡ら	2011	校内委員会(ケース会議)で名前が挙げられた生徒の自尊感情の特徴をつかむ	東京都の公立中学校1～3年生407名(男子196名, 女子211名)	東京都版自尊感情尺度(東京都教職員研修センター, 2009), 教師のチェックリスト	<ul style="list-style-type: none"> ・支援が必要として名前が挙げられた生徒の自尊感情は, 東京都の平均値や対象校の平均値と比べて低い傾向にあった。 ・支援内容や観察記録を教師間で共有すること, 問題行動への予防的観点から, 自尊感情得点を活用することが中学校における支援策として挙げられる。
障7	伊藤	2011c	昼夜間定時制高校における不登校や高校中退における学校適応と自尊感情がどのように関連しているかを検討	高校1年生242名(男子67名, 女子137名, 性別未記入38名)	東京都版自尊感情尺度(伊藤ら, 2010), 学校生活適応感尺度(内藤ら, 1986), 親子関係に関する尺度(Symonds, 1939, 鈴木ら, 1985), 出席状況・遅刻状況(片岡, 1993), 高校入学後の変化に関する尺度, 不登校傾向を測る尺度	<ul style="list-style-type: none"> ・高校における学校適応について, 自尊感情の中でも評価的な側面には教師の存在が, 人間関係に関する側面には友人関係や学業での適応が, 自我の強さに関係する自己決定や自己主張には進路意識の強さが影響。 ・中学校時代に休まず登校していた生徒の高校適応は, 高校入学後も比較的良好であった。 ・中学校不登校経験者は, コミュニケーションの苦手や強い対人不安を感じる者が多く, 高校入学後もその特性を引きずっていることを示唆。 ・中学校時代に完全欠席していた生徒は, 人間関係の苦手意識に加え, 抑うつ感のような精神的ダメージを伴う者も多いため, 心理的・精神的ケアが必要である。 ・高校入学の際に, 高校に対してどのような動機を持っているかが, その後の適応や自尊感情に影響を及ぼす可能性が示唆。

特別支援学校

障8	田島ら	2013a	学校生活における肢体不自由のある児童の自尊感情・自己肯定感に影響を及ぼす要因と, それらが高める指導実践について検討	肢体不自由特別支援学校小学部5年男子2名	「勉強」, 「自分」, 「担任」, 「友達」, 「意見」, 「生活」について100点満点での評価とその理由, 自尊感情測定尺度(東京都教職員研修センター, 2011), 授業理解度アンケート	<ul style="list-style-type: none"> ・「勉強」, 「自分」, 「担任」, そして「生活」の項目から学習の理解度が, 「自分」, 「意見」, そして「生活」から日常生活の充実度, そして「担任」と「友達」から人とのかわりが自尊感情・自己肯定感に影響を及ぼしていることが明らかになった。
障9	榎木ら	2007	中学校から肢体不自由養護学校に進学した生徒とその保護者のニーズと支援を考察	肢体不自由養護学校高等部に在籍する8名の保護者と生徒	半構造化面接法または郵送による質問紙法	<ul style="list-style-type: none"> ・肢体不自由養護学校に入学後, 本人の自己肯定感を感じるようになった。

障10	土田	2011	LD傾向生徒の学習支援	特別支援学校(病弱)の高等部1年生	指導内容表の作成、自己理解と人とのかわりについての個別の対応の工夫、得意なことを生かす指導について1ヶ月毎の評価	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の「わかる」部分が増え、苦手な面の配慮と共に得意な面を伸ばすことで学校生活も前向きになれた。 教員からは一人の生徒に対して対策を考えアイデアを出し合うミーティングの重要性が指摘された。
障11	田島ら	2013b	肢体不自由特別支援学校に在籍する児童生徒の自尊感情を調べ、東京都の通常の学級の児童生徒のデータと比較	肢体不自由特別支援学校に在籍する、コミュニケーションが可能な児童生徒17名(小学部2年1名, 4年生4名, 5年4名, 中学部1年2名, 3年3名, 高等部1年2名, 3年1名)	自尊感情測定尺度(東京都教職員研修センター, 2011)	<ul style="list-style-type: none"> 高1男子と中3男子を除くすべての対象児の学年平均が健常児の平均値より高かった。観点別の平均得点では、全学年を通して「関係の中での自己」が最も高かった。 児童生徒数が少ない中での教員や友人との関係性、子どもの実態やニーズに合った教育課程や教育内容と学びが、児童生徒の自尊感情を高めていると推測。

福祉施設						
障12	阿部ら	2008	軽度知的障害児が、自信や自己肯定感を高め、より適応的な行動を行えるかの検討	児童福祉施設併設特別支援学校に在籍する知的障害を伴う小6女子(IQ64), 小2でADHD, 小4で反抗挑戦性障害と診断	行動観察しながら評価・フィードバックできるシステムを作り、子どもの状態に応じたタイムリーな支援を実施	<ul style="list-style-type: none"> 対象児の情緒の状態が安定し、学校生活において適応的な行動が増えた。 対象児自身が自分の状態を客観的にふり返る機会を設定したことで、自分の状態を知る手がかりを得られることで、自己肯定感を高められた。
障13	松浦	2008	少年院における矯正教育と自尊感情の関連と、発達特性と自尊感情の関連の検討	一定期間の矯正教育を修了して仮出所した114名	Rosenberg自尊感情尺度, 新田中B式知能検査(非言語性集団式知能検査), AD/HD-YSR	<ul style="list-style-type: none"> 入・仮退院時で自尊感情の有意な変化は認められず、矯正教育期間に於いて、自尊感情の変化は限定的であった。 AD/HD-YSRの不注点が入院時の自尊感情と負の相関があった。発達的問題性が自尊感情に影響を与えていた可能性が示唆。
障14	有沢ら	2001	SSTを加味した構成法の実践がどのような影響を及ぼすかの検討	更生保護施設在籍者	メンバーは4~6名に対し、SSTを加味した構成法を実施	<ul style="list-style-type: none"> 受容される体験を通じて自己肯定感と自己効力感を高め、自己の存在を認めることができた。

疾病(成人)						
障15	藤原ら	1998	脳血管障害患者とパーキンソン病患者の障害の回復・進行とself-esteemの関連	脳血管障害患者54名, パーキンソン病患者41名	個別面接によるRosenberg自尊感情尺度, ADL評価, パーキンソン病評価, 上肢機能評価	<ul style="list-style-type: none"> self-esteemはADLや機能障害とは関係が認められなかった。 脳血管障害患者のself-esteemの向上には積極的なりハビリテーションの介入が影響していると推測。
障16	縄井ら	1998	患者の自己評価とADLの関連を解明し、QOLへの効果的介入を検討	病院で理学療法を受けた患者177名, 健常者99名	A D L 評 価 と Rosenberg自尊感情尺度	<ul style="list-style-type: none"> 健常者群と患者群の比較から、ADL能力とself-esteemの関連が認められ、患者群の中では重度のADL障害が生じた四肢体幹障害者のself-esteemが最も低かった。 ADL障害で自己評価は低下するが、低下した自己評価の回復にはADLの改善だけでは不十分。
障17	篠原ら	2002	脳梗塞を発症した患者におけるRosenberg自尊感情尺度の信頼性・妥当性について検討	病院で入院治療を受け、発症後6ヶ月~3年半前後の脳梗塞を発症した患者38名	現在の自尊感情(Rosenberg自尊感情尺度)と脳梗塞発症前の自尊感情を調査し、2週間後に再度調査	<ul style="list-style-type: none"> 脳梗塞発症後外来通院している患者におけるRosenberg自尊感情尺度の信頼性・妥当性を証明。 脳梗塞発症前のRosenberg自尊感情尺度を回顧によって調査したが、再テスト法による再現性に問題がみられた。
障18	國方ら	2006	統合失調症患者の社会生活技能と自尊感情の因果関係の検討	統合失調症と診断され1年以上経過し、初回調査と追跡調査(12ヶ月後)に協力が得られた61名	Rosenberg自尊感情尺度, 社会生活技能尺度(國方ら, 2002)	<ul style="list-style-type: none"> 病的体験や対人関係の不安から、統合失調症患者の自尊感情は低い。 統合失調症患者の高い社会生活技能は自尊感情の高さを規定するが、高い自尊感情が統合失調症患者の社会生活技能を良好にするわけではない。

た論文は3本(14%)であり、学齢期全般を対象とした論文が多く見られた(表4)。

(1) 健常児・者における自尊感情・自己肯定感の年齢変化

健常児・者の年齢変化については、上でみた学齢期の自尊感情・自己肯定感の要因として指摘された「人とかかわり」、「親の自尊感情」、「学業」の3要因を支持する論文が確認された。

「人とかかわり」については、4本が支持していた(総1, 総10, 総15, 総17)。幼児を対象にした論文では、グループ内で子どもに役割を持たせ、仲間から認められることが自己肯定感を高めるという指摘(総1)。学齢期を対象とした論文では、自尊感情の低い状態にある子どもは、他人の評価を気にしすぎるという指摘や(総17)、互いを高め合う友だち関係が自尊感情を育むという指摘もある(総10)。また、親子関係と発達段階の重要性の指摘もある(総15)。

「親の自尊感情」についても4本が支持していた(総2, 総7, 総14, 総17)。親の自己肯定感は、ありのままの子どもを受け入れるために必要であるとの指摘(総2)、親自身も評価を気にしすぎると状況に陥って、自信を失い、自尊感情が傷つきやすい状態であるため(総17)、親や教師など子どもとかかわる大人自身が今の自分に自尊感情をもつことが重要であると指摘している(総7, 総14)。

「学業」については2本が支持しており(総6, 総12)、授業中の子どもの発言について、教師が正否を判断してしまうため、子どもの自尊感情が低下するとの指摘や(総6)、学校が知識量や処理速度の優劣で子どもを評価することは自尊感情に影響するとの指摘もある(総12)。

「自尊感情・自己肯定感の構造」は3本で検討されている(総8, 総16, 総19)。自尊感情・自己肯定感には3つの観点があり(「自己評価・自己受容」、「関係の中での自己」、「自己主張・自己決定」)、これらをバランスよく高めることが必要であるとの指摘(総19)。他者との比較で高められる社会的自尊感情と、絶対的・無条件に自らの存在を認める基本的自尊感情があるとし、基本的自尊感情の上に社会的自尊感情が乗っているとの指摘(総16)。そして、自尊心を肯定的評価と否定的評価の関数とし、私的・個別的側面と公的・社会的側面とに分析する論文もある(総8)。

その他には、「居住空間」とセルフエスティームの関係(総15)、肯定的な「規範意識」と自尊感情の関連(総19)、柔軟で順応性のあるセルフエスティーム

が必要とする「自尊感情・自己肯定感の認知の仕方」(総3)、「性トラブル」の自己肯定感への影響がある(総9)。また、自尊感情と失敗経験に対する「ライフストレッサー」との関係(総4, 総13)、「カウンセリング」が何らかのきっかけで低くなった自尊感情の回復に有効であるとの指摘もある(総18)。

(2) 健常児・者における自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチ

今回の整理で得られた「支援的な学級づくりを通じた人間関係の育成」、「PDCAサイクルによる指導」という視点が、総説論文においても重要とされている。

「支援的な学級づくりを通じた人間関係の育成」については3本が指摘し(総1, 総5, 総18)、幼児においては、仲間から認められる環境を整えることが(総1)、小学校においては、子ども同士でうなずきやあいづちを打ちながら聞く姿勢が有効であると指摘している(総5)。また、自己の良さに気づくためのグループワークや他者から肯定的なフィードバックも有効であるとの指摘がある(総18)。

「PDCAサイクルによる指導」については、校長・園長の指導の下、職層ごとに役割を明確にし、PDCAサイクルに沿って取り組むことの必要性が指摘されている(総19)。

総説論文でこの2点以外に有効であると指摘されたアプローチは、「教科指導」と「大人の働きかけ」であった。「教科指導」に関しては、関連の深い学習内容で高める方法と、教師や友だちとかかわりによる指導で高める方法があると指摘している(総19)。「大人の働きかけ」について、教員の授業中の活発な発言を促す姿勢、子どもの意見を平等に扱う姿勢が重要であり(総6)、競争よりも共同の関係を促す雰囲気作りも重要であるとしている(総10)。親の態度として、子どもを独立した一人の人間として扱うことが重要であるとしている(総14)。教師と保護者に共通して必要な態度として、柔軟で適応性のあるセルフエスティームの形成を促すこと(総3)、大人が互いに認め合う人間関係、尊重し合えるありさまを子どもたちの周りに用意すること(総7)、思春期の主体的な行動変容を促すこと(総9)、思春期の自己を、客観的に映す鏡としての役割を教員や家族が担うこと(総11)、自尊感情が低く、評価を気にする子どもに対しては、問題の良いところや問題を含めた良いところを指摘し共に考える態度が重要であると指摘している(総17)。

(3) 障害・疾病・不登校などのある児・者の自尊感情・自己肯定感の影響要因

障害・疾病のある児・者を対象とした総説論文は3本あり、疾病・障害を対象とした論文は1本（総20）、障害全般についての論文が1本（総21）、肢体不自由を対象とした論文が1本（総22）であった。

上で整理された影響要因である「障害・疾病を原因とする状態」を指摘するものは3本全てであった（総20, 総21, 総22）。障害のため失敗経験が積み重なり、自尊感情が損なわれやすく（総21）、また、管理された生活のため自己決定・自己選択の意識が持ちにくいという指摘がある（総22）。同質性志向対独自性志向、競争志向対協同志向、自己肯定感そして目標・ビジョンという4つの軸が相互に絡まり合い、疾病・障害をもつ人の生き方や行動パターンが形成されているとの指摘もある（総20）。

(4) 障害・疾病などのある児・者の自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチ

上で整理された自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチとして「担任の障害理解・支援」と「社会生活能力向上・リハビリテーション」が総説論文でも指摘されている。「担任の障害理解・支援」について、大人による適時・適切な誉め方が、子どもの肯定的な自己イメージを形成すると指摘し（総21）、「社会生活能力向上・リハビリテーション」については、生活環境全体で捉える中で問題を解決していく支援が重要であると指摘している（総22）。

(5) 小括

上の整理で、学齢期を対象にした研究において9要因が示唆されたが、実践研究で指摘された要因との重複は「人とのかかわり」、「親の自尊感情」、「学業」の3要因にとどまった。総説論文で新たに指摘された要因は、「自尊感情・自己肯定感の構造」、「居住空間」、

「規範意識」、「自尊感情・自己肯定感の認知の仕方」、「性トラブル」、「ライフストレッサー」、「カウンセリング」の7要因であった。自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチに関しては、整理した4点のうち、実践研究との重複は「支援的な学級づくりを通じた人間関係の育成」と「PDCAサイクルによる指導」の2点であった。また、総説論文で新たに指摘されたアプローチは「教科指導」と「大人の働きかけ」の2点であった。

障害・疾病などのある児・者における研究では7要因が示唆されたが、総説論文では「障害・疾病を原因とする状態」の1要因だけが指摘されていた。また自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチでは、ここでの整理では7点示唆されていたが、総説論文では「担任の障害理解・支援」と「社会生活能力向上・リハビリテーション」の2点に留まった。

VI まとめにかえて

本論では国内で発表された60本の自尊感情・自己肯定感に関する論文を、実践研究と総説論文について、障害・疾病・不登校などのある児・者を対象とした研究に分けて、整理・検討をした。また、それにあたって健常児・者の年齢変化に関する研究も整理した。

まず最初に整理を試みた健常児・者の自尊感情・自己肯定感に影響を与えている要因について、学齢期を対象とした実践研究のみで指摘された影響要因は、「性受容」、「身体的意識」、「進路意識」、「集団への所属」、「悲哀感情」、「不登校」の6要因が確認され、若年者・就業者の自尊感情については、「同居している家族形態」、「就労状況・収入」、「学生時代の状況」の3要因が指摘された。一方、学齢期を対象とした総説論文のみにおいて指摘された要因は、「自尊感情・自己肯定感の構造」、「居住空間」、「規範意識」、「自尊感

Table 4 自尊感情・自己肯定感総説論文（22論文）

著者	年	タイトル・目的	主たる論点
幼児			
総1	井口	2002	保育者および幼児が互いに自己肯定感を育んでいける関係づくりを視野に入れた保育実践のあり方について検討
			<ul style="list-style-type: none"> ・自己肯定感を育む保育として、発達領域ごとに設定されている到達度基準（到達目標）をもとにした評価ではなく、一人ひとりの異なった「発達の過程」という見方で総合的に見ていく必要がある。 ・保育中に子どもグループ内で役割を持たせ、集団内の位置づけをすることで、各自が役割を自覚し、仲間と力を合わせて取り組み、仲間から認められることが自己肯定感を高める。 ・肯定的に理解できる保育者の存在が、子どもの今を尊重する姿勢、主観的な意味づけによる発達理解、自覚化などによる発達の補償の可能性が生じる。

- 総2 高垣 2006 「自己愛」と「自己肯定感」から考える子育てにおける「平和」と「暴力」について考察
- ・「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感(自分を愛する心)は、自分の命、自分の全存在に向けられる。「自己愛」は自分の部分的な能力、特性に向けられるのである。「平和」の問題を考えると、この区別が大事。
 - ・親が「自己愛」にとらわれると、「自己愛」の延長線上で子どもを愛していることが少なくない。そのことが「愛情」の名のもとに子どもの人格の独立性を侵し、子どもを支配し、コントロールする事態を引き起こしている。
 - ・「自分が自分であって大丈夫」という親自身の自己肯定感は、競争原理ならぬ共感原理によって結ばれた「親の会」のような人間関係の中で、自己愛へのとらわれから解放され、「ありのまま」の自分を受け容れることができるようになり、そういう風に子どもと向き合えたとき、子どもをまるごと「ありのまま」に受け容れられるようになる。

小学生

- 総3 伊藤 2007 柔軟なセルフ・エスティームと自立性について検討
- ・子どもが、能力は努力によって変化するという認知をもち、結果は報酬や罰ではなく情報としてとらえ、自分の有能さを高めることに着目するような働きかけが必要。
 - ・柔軟で順応性のあるセルフエスティームを形成できるように子どもに働きかけることが、子どもの自立性を促す。
- 総4 中間 2007 自尊感情の定義に内包されるさまざまな意味合いを検討
- ・万能感に満ち、あらゆる願望は満たされて当然であると期待するような心のあり方の「誇大自己」の状態のときに、大人が子どもが表現することに対してしっかりと受け止め、賞賛したりほめたりしてあげること、また誇大自己が傷ついたときにそれを埋められるような役割を果たせるかがこの時期の大人に求められる。
 - ・全般的に自尊感情の低い人は高い人に比べて、日々のできごとをより否定的に評価し、自分の気分により大きな衝撃を与えるものとみなす傾向があり、成功経験・失敗経験などを自己評価に直結するような経験のとらえかたも自尊感情のあり方である。
 - ・自尊感情が高いものは成功経験を意識し、低いものは失敗経験を強く認識する。
 - ・自尊感情の高さが、個人がストレスに対処していく一助となり、逆に低いとライフストレスにより希望を喪失する。
- 総5 緒方 2007 自尊感情を高めるグループワークについて検討
- ・グループワークで発表するときは同じグループの児童がうなずきながら、あいづちを打ちながら聞くことで受容される経験となり、児童の自尊感情が高まる。
- 総6 大熊 2007 小学校における、一人ひとりの意見を尊重する授業実践について
- ・小学校高学年から中学校にかけて自己が確立し、自分の意見がもてるようになるが、授業中の発言は減ってしまう。その理由は2つあり、子どもが豊かな発想を引き出すカリキュラムでないこと。もう1点は、子どもの発言の正否を教師が判断してしまうため、子どもの自尊感情が低下し、意見を言うことに自信がもてなくなってしまうことである。
 - ・子どもの思いや不安を理解せずに、教師自身が期待する答えを言わせようとして子どもとかかわってしまうのであれば、子どもの自尊感情を大きく傷つけることになる。
 - ・子どもが自由に発想を広げ、自信をもって発言できるようにするためには、子どもの心が安定していることと、常に自分の発想を受け入れてもらえるという安心感をもたせることが大切。
 - ・子どもの自尊感情を高め、活発な発言を促す教師のスキルとは、子どもの意見をとにかく平等に扱うこと。学級に安心・安定の雰囲気を作り上げること。
- 総7 園田 2007 国際比較調査から見る日本の子どもの自尊感情の検討
- ・日本の子どもの自尊感情が他国と比べて低いことばかりに目を向けるのではなく、親や教師など子どもとかかわる大人自身が今の自分に自尊感情をもっているか、誇りをいただいているか、素直な自分といえるかが大切。大人が互いに認め合う人間関係、ならびに尊重し合うありさまを子どもたちの周りに日常的に用意できている事が重要。

学齢期・一般 (小・中・高・思春期)

- 総8 伊藤 1995 特性としての「自尊心」に関する研究について、1985～95年の日本における研究を中心にレビュー
- ・「自尊心」は、その有効性がその全体性・包括性にあるならば、「自己についての全般的な感情、評価、ないし態度」と定義できる。これをさらに分析的に考えるなら、肯定的評価と否定的評価の関数として捉えられること、私的・個別的側面と公的・社会的側面をその基盤として持つこと、形成過程を考慮すれば、「誇り」、「自己受容」、「優越感」という構造を持つことが挙げられる。

総9	和田	2003	思春期支援の現場において、主体的に若者が行動変容をきたすための支援について検討	<ul style="list-style-type: none"> ・思春期では自己肯定感を育てる支援が必要とされる。非社会的行動、反社会的行動を抑制する意味でも、自己肯定感は重要である。援助交際など性のトラブルに巻き込まれる思春期の若者たちは自己肯定感が低いと言われている。セルフエスティームを育てることは自分をプラスに認知して生きることへとつながる。将来へ向かっての期待、大きな希望を持ち「自己コントロール」ができるようになっていくと言われている。 ・思春期に対する、主体的な行動変容をきたす支援、自己肯定感を育む支援が効果が高い。
総10	会沢	2007	友だち関係の中で育つ自尊感情について	<ul style="list-style-type: none"> ・「互いを高めあう友だち関係」こそが、自尊感情をはぐくむ条件であり、子どもの自尊感情を育てる友だち関係とは、競争よりも共同の関係が重要。そのため、自尊感情を育てる上で、学校の果たす役割がきわめて大きい。
総11	橋本	2007	自己愛の視点からプライドが高すぎる子どもについて検討	<ul style="list-style-type: none"> ・自尊心が高すぎることは、虚栄心にもつながり、自己評価が非現実的に高い状態。自己評価が適度に高いことは積極性につながるが、なかには自分の現状に合わないくらい高い自己評価をもつ人もいる。このように高い自己評価は自己愛ともよばれる。 ・自己愛パーソナリティの特徴は、①心の中で、人並み外れてすばらしい理想的な自分を描いている。②このようなすばらしい理想的な自分を現実のものにしようとして努力している。③理想的な自分を常に保っていたいので、周りとうまくいかないことや批判を受けることに敏感で、すぐに傷ついてしまう。④自分の心の中の理想自己の実現にしか関心がないために、自分本位の解釈や思い込みが強くなる。 ・自己評価が高すぎる場合には、自分の能力を客観的に見つめて、ときにはあきらめよく切り替えられる柔軟さが必要になってくる。このときに必要なのが、「自分を映す鏡」になってくれる人の存在であり、対象は年齢に応じて、家族、教師、友人などである。
総12	樋田	2007	学校教育による影響に焦点を当てながら、日本の子どもたちの自尊感情について検討	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和50年代の中学校では受験指導の過熱化により、「学業の達成失敗による自尊感情の低下」→「逸脱行動による自尊感情の回復」という図式の逸脱行動(校内暴力や反社会的態度)が社会的に問題化した。 ・ゆとり路線のはじまりにより、授業の内容や方法の変化が生じ、学校は「知識量や処理速度の優劣」で子どもの自尊感情を高めたり、傷つけたりすることから手を引いた。 ・勉強に関する自尊感情は、友人との比較よりも、内発的な感情に強く影響されている可能性が指摘できる。
総13	岩田	2007	乳幼児期から思春期における自己の発達という視座から自尊感情の育ちを検討	<ul style="list-style-type: none"> ・人は自身をもっとも可愛く自身へのうぬぼれも強い自己中心的な存在であるため、どのような形であっても自尊感情をまったく欠いた状態では生きることができない。 ・自己の鏡映像認知(向かい合う鏡の像が自分である)が可能になってくる一歳半ばから二歳のころにかけて、自己の評価的な感情が芽生える。その後2～3歳で行動主体としての自立要求が強くなり、自己が発達する。4歳になると他者の期待や要求を顧慮しながら行動するようになり、4～5歳で他者の思いに気遣うようになる。小学校では生活の中心が家庭から学校へ変わり、仲間や教師からの評価が高くなる。そこで自己の側面へのネガティブな評価や、他者との比較もなされ、それが子どもの自尊感情を低下させていくという指摘もある。 ・自尊感情が高い子どもは、現在の自分に満足しており、自分の能力や性格に対してもポジティブな感情をもっている。低い子どもほど、自分の不十分さに敏感に注意が向き、学校生活の中で不安やストレス、疎外感が強い、また教師や仲間からの評価に敏感で失敗や不出来をことさらに恐れ、自信がなく、くよくよと悩む傾向が強い。
総14	金澤	2007	子どもの自尊感情を育む親・教師の態度と関わりについて検討	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの自尊感情の育成を妨げてしまう親は、その背景に親自身の強い不安感がある。親自身が適度な自尊感情を身につけていない場合があり、弱い立場の子どもを、あの手この手でコントロールし、親自身の不安を解消しようとする。 ・自尊感情を育てるために親がすべきことは、どんなに小さくても子どもを独立した一人の人間として扱うこと。 ・親や教師が子どもの適度な自尊感情を育むためには、①自己存在感を育む(子どもの言葉に耳と目と心を傾ける)、②達成感を感じさせる(達成したときに褒め、自信をもたせる)、③子どもを信じ、失敗を責めない、④所属感をもたせ、肯定的ストロークを発信する(自分が周りの人たちにとって大切な存在であると感じる)、⑤モデルを示す(親や教師が自尊感情が高い状態の適切な態度のモデルとなる)。 ・自尊感情は思春期においては、ときに命とひきかえてしまうほど大きな存在である。

- 総15 北浦 2007 セルフエスティームを高め、自立と信頼関係を育む居住空間についての検討
- ・親子関係の3つのコミュニケーションは、言葉などで親の養育態度や影響を実現する「会話型」コミュニケーションと、遊びなどの行為をともにする「行為の共有型」コミュニケーション、雰囲気や態度など「副産物として伝わる情報」の3つである。小学生時には親子がともに行動する「行為の共有型」コミュニケーションが相互理解を深め、親子の絆を強くし、居間や家族室が活発に使われる。高校生では行為の共有よりも「会話型」が効果的である。
 - ・子育て期には「行為の共有」のできる住空間を使うことで親子の結びつきを強めることができる。積極的に家族で行為の共有を楽しむ住空間づくりが大切。
- 総16 近藤 2007 「体験の共有」と「感情の共有」という共有経験の不足について述べ、それに起因してアンバランスに育った自尊感情の問題、つまり「生きる力」が不足する事態について、その解決策の検討
- ・「社会的自尊感情」は他者との比較で勝っていると感じられたときに、高められるもの。「基本的自尊感情」は、絶対的、無条件に自らの存在を認める感情。基本的自尊感情の上に社会的自尊感情が乗っていることが自尊感情の構造。
 - ・自尊感情は、基本的自尊感情と社会的自尊感情のバランスが取れていることが大切であり、基本的自尊感情は「強くする」ものであり、社会的自尊感情は「高めるもの」である。じっくりと育まれて形成された、しっかりとした基本的自尊感情と競争や努力によって高められる社会的自尊感情をバランスよく育てることが重要。
 - ・基本的自尊感情は「いのち」をギリギリのところ支える。生きていれば、「生きる力」の原動力そのものである社会的自尊感情の働きによって、「生きる力を発揮する機会も訪れる。バランスよく構成された自尊感情は、一人ひとりの子どもの「生きる力」を根本で支えている。
- 総17 阪 2007 他人からの評価を気にしすぎるあまり、日常生活に支障をきたす子どもを理解し、その援助について検討
- ・自尊感情の低い状態では、他人の評価を気にしすぎることでもさまざまな弊害が生じる。子どもに今すぐ援助を行う場合、自尊感情が低い原因を追究するより、今のような悪循環が起きており、それを変化させるために何ができるかを考える方が有効であることが多い。
 - ・自尊感情が低く、評価を気にする子どもにとって、問題はさておき、ほかにもあなたの良いところはあるというような評価の仕方では自信を取り戻すことは難しい場合が多い。評価に過敏な状態であるので、問題が評価を下げていると勘えて自信を失うことになりかねないため、問題の良いところや問題を含めた良いところを考えてみることは、悪循環になっている状況に変化を起し、子どもが自信を取り戻す、自尊感情を育てるきっかけになることが期待できる。
 - ・子どもの最大の援助者である親自身も評価を気にしすぎる状況に陥って、自信を失い、自尊感情が傷つきやすい状態であることがある。
 - ・自尊感情の低い状態で、他人の評価を気にしすぎる子どもの援助のポイントは、①生じている問題の悪循環に変化を起す。②子どもの直接の援助者の自信を取り戻す。③反抗期などの発達を考慮し、肯定的にとらえられる援助の視点をもつ。④援助がうまくいかななくなることはチャンスであると捉え、「評価」に対する意味づけを変え、自尊感情を育てる援助の可能性と考える。
- 総18 沢崎 2007 自尊感情を取り戻すカウンセリングについて検討
- ・自尊感情が小さいころからずっと低い場合と、何らかのきっかけで低くなった場合があり、後者の場合はカウンセリングによって自尊感情の回復が期待できる。
 - ・セルフエスティームトレーニングは、グループワークで自己の良さに気づく、あるいは他者から肯定的なフィードバックをもらう等、自尊感情の向上を狙いとする。
 - ・カウンセリングの目標は結果的には自尊感情の向上だといえる。
- 総19 東京都教職員研修センター 2012 学校教育において、自尊感情・自己肯定感を高める方法について検討
- ・自尊感情や自己肯定感を高めるポイントとして、自尊感情の3つの観点(「自己評価・自己受容」、「関係の中での自己」、「自己主張・自己決定」)をバランスよく高めていくことと、人権教育の視点から、自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることが重要。
 - ・規範を肯定的に捉えている児童・生徒ほど、自尊感情や自己肯定感が高い傾向があり、また家庭での生活習慣や保護者の理解と信頼、子どもが保護者の意見を受け入れる態度なども自尊感情・自己肯定感に関連がある。
 - ・自尊感情・自己肯定感を高める教育を意図的・計画的・組織的に取り組むためには、校長・園長の指導の下、職層ごとに役割を明確にし、PDCAサイクルに沿って取り組むことが必要。
 - ・教科指導で自尊感情や自己肯定感を高めるには、関連の深い学習内容で高める方法と、教師や友だちとのかわりによる指導方法で高める方法がある。

障害・疾病

総20	岡	2001	疾病・障害をもつ人の(1)同質性志向と独自性志向、(2)競争志向と協同志向、(3)自己肯定感、(4)目標行動、4つの軸から成る価値観・生き方の構造を考察	<ul style="list-style-type: none"> ・疾病や障害をもっている人ほど、自己肯定感の有無は重要な意味を持つので、自己肯定感の程度という軸も大切。また、人間の生き方を考える際に、目標の有無とそのあり方は重要である。このことは疾病・障害をもつ場合にも当てはまるし、より必要性が高いといえる。したがって、同質性志向対独自性志向、競争志向対協同志向、自己肯定感、そして目標・ビジョンという4つの軸が相互に絡まり合いながら、生き方や行動のパターンが形成されると推測できる。 ・4要因中の2要因の組合せによる座標軸をとり、各座標軸で作られる平面の構造を検討した結果、4要因の組合せのパターンは、今日の教育・社会状況を把握する上で有効だと考えられた。同時に個人と社会の在り方の相互関連性が推測された。
総21	白石	2007	障害児の自尊感情についての検討	<ul style="list-style-type: none"> ・障害児は、幼い時から、障害とそれに伴う行動の全責任を負わされ、障害のみならず自己や存在までも否定されてしまう過酷な状況にある。したがって、彼らの「自分を大切に思う気持ち」である自尊感情は損なわれやすく、「自分ができるんだ」という自己効力感を得る機会が少ない。そして「自分存在の核」となる自己イメージは、日々、低められてしまう。 ・子どもの方からできたことを誉めてほしいという行動が起きた時に、大人が適切に誉めることは、子どもの自尊感情を満たし、肯定的な自己イメージ「自己肯定感」を形成する上で大切となる。 ・前向き（能動的）に心を動かして行動を起こし、「こうやればできるんだな！」という自己効力感と「よくできたね」という他者評価（誉め）が自尊感情を満たし、自傷行為の減少につながる。
総22	泉	2011	筋ジストロフィー患者の潜在ニーズについて検討	<ul style="list-style-type: none"> ・努力ではどうにもならない限界を児童期・思春期・青年期と受け入れていく過程の中で、自助努力の限界を感じ否定的な自我を身に着けてしまうことがある。管理された生活に慣れてしまい自己決定・自己選択の意識を持ちにくかったり、経済面では、ほとんど保護者の管理であったりすることから、社会の中で保護される状態から脱し自己の主体性を取り戻すことが重要。 ・疾病支援だけでなく、本人が人として成長していく過程に、生活モデルとしての概念が重要である。本人の個人的な問題ではなく、家族の問題ではなく、難病疾患を抱えることでその人が困ることを生活環境全体で捉える中で問題を解決していく支援の重要性が明確になった。

情・自己肯定感の認知の仕方]、「性トラブル」,「ライフストレッサー」,「カウンセリング」の7要因であった。また、実践研究と総説論文の両方で指摘されたのは、「人とのかかわり」,「親の自尊感情」,「学業」の3要因であった。

健常者の自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチについて、実践研究のみで指摘されたのは、「客観的な学級経営評価」と「保護者との連携」の2点であり、総説論文のみの指摘は、「教科指導」,「大人の働きかけ」の2点であった。実践研究、総説論文の両方で指摘されたのは、「支援的な学級づくりを通じた人間関係の育成」,「PDCAサイクルによる指導」の2点であった。

障害・疾病・不登校などを対象とした自尊感情・自己肯定感の影響要因については、実践研究において「学業」,「人とのかかわり」,「日常生活動作・技能」,「進路意識」,「虐待やいじめ」,「容姿の自己評価」の6要因が指摘され、実践研究と総説論文両方で指摘された要因は、「障害・疾病を原因とする状態」であり、総説論文では新たな要因は指摘されなかった。

障害・疾病・不登校などを対象とした自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチについては、実践研究の

みで指摘されたアプローチは「良好な人とのかかわり」,「保護者へのアプローチ」,「適切な教員配置」,「学習の場の変化」,「自分自身の障害理解」の5点であった。実践研究ならびに総説論文共に指摘していたのは、「担任の障害理解・支援」と「社会生活能力向上・リハビリテーション」の2点であり、総説論文で新たなアプローチの指摘はなかった。

自尊感情・自己肯定感に影響を与える要因について、健常者を対象とした論文では19要因が確認され、障害・疾病・不登校を対象とした論文では7要因であった。一方、自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチについては、健常者を対象とした論文では6点が、障害・疾病・不登校を対象とした論文では7点が指摘された。以上より、健常者を対象とした論文では、自尊感情・自己肯定感の影響要因を特定する論文が多く、障害・疾病・不登校を対象とした論文においては、影響要因と並行して高めるアプローチに関する研究が行われていることが示唆された。

自尊感情ならびに自己肯定感に関する研究は2000年以降増加傾向であり、特に近年発表論文の数は増えている。そのため、今後発表される論文の整理検討についても引き続き行う必要がある。また、今回は国内

で発表された論文のみを対象とし、海外で発表された論文について整理・検討をしていない。この点については、今後の課題としたい。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、東京都立城南特別支援学校の先生方のご助言・ご協力を頂きました。感謝申し上げます。

引用文献

- 阿部美穂子・廣瀬真理 (2008) 軽度知的障害児の安心、自信、自己肯定感の獲得に関する研究：児童福祉施設併設特別支援学校における実践から。富山大学人間発達科学部紀要, 3 (1), pp. 55-66.
- 会沢信彦 (2007) 「互いを高めあう友だち関係」の中で育つ自尊感情。児童心理61 (10), 920-924.
- 有沢孝治・小林正稔 (2001) SSTを加味した構成法の実践的模索：更正保護施設での実践事例にみる一考察。東海大学紀要。教育研究所9, 79-100.
- 藤原瑞穂・西岡江理子・阿部和夫 (1998) 脳血管障害患者とパーキンソン病患者のself-esteemに関する研究：罹病期間と障害の影響。大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要4, 37-44.
- 橋本和幸 (2007) プライドが高すぎる子—自己愛の視点から。児童心理61 (10), 930-934.
- 樋田大二郎 (2007) 学校教育と子どもの自尊感情—社会の変化, 教育政策から考える。児童心理61 (10), 902-907.
- 井口均 (2002) 自己肯定感を育てる保育。長崎大学教育学部紀要。教育科学62, 11-23.
- 石川瞭子 (2007) 自尊感情が傷ついた子への援助—虐待・いじめ。児童心理61 (10), 969-973.
- 伊藤篤 (2007) 柔軟なセルフ・エスティームと自立性。児童心理61 (10), 896-901.
- 伊藤美奈子 (2011a) 自尊感情から見たタイプ分類の試み—自尊感情8タイプの特徴—。慶應義塾大学自尊感情や自己肯定感に関する研究報告書。5-22.
- 伊藤美奈子 (2011b) 自尊感情に関する親子マッチングデータについて。慶應義塾大学自尊感情や自己肯定感に関する研究報告書。23-36.
- 伊藤美奈子 (2011c) 高等学校を対象にした調査結果—自尊感情と学校適応・親子関係との関連に注目して—。慶應義塾大学自尊感情や自己肯定感に関する研究報告書。54-67.
- 伊藤忠弘 (1995) 自尊心概念及び自尊心尺度の再検討。東京大学教育学部紀要34, 207-215.
- 岩田純一 (2007) 自尊感情はどう育つか—乳幼児期から思春期。児童心理61 (10), 890-895.
- 泉妙子 (2011) 筋ジストロフィー患者の潜在ニーズ。近畿医療福祉大学紀要, 12 (1), 119-140.
- 金澤広明 (2007) 子どもの自尊感情を育む親・教師。児童心理61 (10), 944-949.
- 樫木暢子・奥住秀之 (2007) 中学校から肢体不自由養護学校に進学した生徒とその保護者の進路選択・決定：都立A養護学校での聞き取り調査から。東京学芸大学紀要。総合教育科学系58, 295-305.
- 北村英哉 (1998) 自己の長所、短所は他者認知によく用いられるか。教育心理学研究46 (4), 403-412.
- 北浦かほる (2007) 自立と信頼関係を育む居住空間—自尊感情を高めるために—。児童心理61 (10), 960-965.
- 古賀裕美 (2011) 広汎性発達障害が疑われる児童生徒の調査。慶應義塾大学自尊感情や自己肯定感に関する研究報告書。73-93.
- 近藤卓 (2007) 「生きる力」を支える自尊感情。児童心理61 (10), 915-919.
- 越野由香 (2011) 高機能自閉症児の自己肯定感と子ども集団—通常学級でのある取り組みから—。実践女子短期大学紀要, 32, 13-23.
- 久芳美恵子・竹村美砂 (2004) 自己肯定感と人とのかかわり。東京女子体育大学紀要39, 15-23.
- 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸 (2005) 中学生の自己肯定感と人とのかかわりとの関連について。東京女子体育大学紀要40, 19-28.
- 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸 (2006) 小学生の自己肯定感と人とのかかわりとの関連について。東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要41, 13-24.
- 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸 (2007) 小, 中, 高校生の自己肯定感に関する研究。東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要42, 51-60.
- 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸 (2009) 小学生の自己肯定感と性受容に関する研究—社会的性意識と父母像との関連—。東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要44, 55-66.
- 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸 (2010) 高校生の自己肯定感と性受容に関する研究—社会的性意識と父母像との関連—。東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要45, 143-154.
- 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸 (2011) 中学生の自己肯定感と性受容に関する研究—社会的性意識と父母像との関連—。東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要46, 45-60.

- 久芳美恵子・田島真沙美・小林正幸 (2012) 大学生の自己肯定感と性受容に関する研究—社会的性意識と父母像との関連—. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要 47, 41-50.
- 國方弘子・中嶋和夫 (2006) 統合失調症患者の社会生活技能と自尊感情の因果関係. 日本看護研究学会雑誌 29 (1), 67-71.
- 松本陽子・山崎由可里 (2007) 小学生における ADHD 傾向と自尊感情. 和歌山大学教育学部紀要. 教育科学 57, 43-52.
- 松浦直己 (2008) 少年院在院者の発達の問題性と自尊心との関連. 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 (17), 35-40.
- 養内豊 (2010) 自尊感情と身体的自己概念の関係性について: ボトムアップモデルとトップダウンモデル. 北星学園大学文学部北星論集 47 (2), 13-19.
- 中間玲子 (2007) 自尊感情の心理学. 児童心理 61 (10), 884-889.
- 中山勘次郎・西山康春・柳澤登 (2011) 児童用自尊感情尺度の検討. 上越教育大学研究紀要 30, 63-74.
- 中山奈央・田中真理 (2008) 注意欠陥/多動性障害児の自己評価と自尊感情に関する調査研究. 特殊教育学研究 46 (2), 103-113.
- 縄井清志・広村健・岸あゆみ・原崎淳子・伊東浩一・篤春夫・佐藤和男・岩上哲也 (1998) 疾病による ADL 障害と自己評価 (Self-esteem) との関連性. 理学療法学 25 (5), 300-307.
- 西田依子 (2012) 小学生の自尊感情を育む学級経営のあり方: 自尊感情が低下する中学年を中心に. 教師教育研究 8, 163-172.
- 緒方健二 (2007) 自分や友だちのよさを見つけ合う—学級でのグループワークを通して—. 児童心理 61 (10), 955-959.
- 岡茂 (2001) 疾病・障害をもつ人間の生き方と価値観について: 4 要因による枠組みの検討を通して. 東海大学健康科学部紀要 6, 51-56.
- 大熊雅士 (2007) 一人ひとりの意見を尊重する授業—活発な発言を促すスキル. 児童心理 61 (10), 950-954.
- 阪幸江 (2007) 他人の評価を気にしすぎる子. 児童心理 61 (10), 925-929.
- 沢崎達夫 (2007) 自尊感情を取り戻すカウンセリング. 児童心理 61 (10), 979-984.
- 清水美緒・橋川真彦 (2009) 小学校高学年における学習意欲に影響を及ぼす要因. 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 32, 117-124.
- 下村英雄 (2011) 若年者の自尊感情の実態と自尊感情等に配慮したキャリアガイダンス. 労働政策研究・研修機構, ディスカッションペーパー No. 11-06.
- 篠原純子・兒玉和紀・迫田勝明・金久重子・百本文子 (2002) 脳梗塞発症後の患者における Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性・妥当性. 九州大学医療技術短期大学部紀要 29, 87-96.
- 白石雅一 (2007) 障害をもつ子の自尊感情を考える. 児童心理 61 (10), 974-978.
- 園田雅代 (2007) 今の子どもたちは自分に誇りをもっているか—国際比較調査から見る日本の子どもの自尊感情. 児童心理 61 (10), 874-883.
- 田島賢侍・奥住秀之 (2013a) 肢体不自由特別支援学校小学部における児童 2 名の自尊感情の変化と実践—学習・人間関係・学校生活の自己評価を通して—. SNE ジャーナル 19, 231-245.
- 田島賢侍・奥住秀之 (2013b) 子どもの自尊感情・自己肯定感等についての定義及び尺度に関する文献検討: 肢体不自由児を対象とした予備的調査も含めて. 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系 64 (2), 19-30.
- 高垣忠一郎 (2006) 「自己愛」と「自己肯定感」から考える子育てにおける「平和」と「暴力」. 心理科学研究会, 心理科学 26 (2), 48-58.
- 高坂康雅 (2009) 青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情と反応行動との関連. 教育心理学研究 57 (1), 1-12.
- 東京都教職員研修センター (2011) 自信やる気確かな自我を育てるために (基礎編). 東京都教職員研修センター研修部教育開発課.
- 東京都教職員研修センター (2012) 自信やる気確かな自我を育てるために (発達編). 東京都教職員研修センター研修部教育開発課.
- 土田優子 (2011) LD 傾向生徒の自己肯定感を高める支援の在り方: PDCA サイクルの評価を活用して. 教育実践研究, 上越教育大学学校教育実践研究センター, 257-262.
- 鶴岡舞・古賀裕美 (2011) 中学校での自尊感情を活用した生徒理解. 慶應義塾大学自尊感情や自己肯定感に関する研究報告書. 37-53.
- 和田由香 (2003) 健康上の諸問題に対する思春期支援: 主体的な行動変容を促し, 自己肯定感を高める支援の検討. つくば国際短期大学紀要 31, 129-139.
- 渡辺聡 (1995) 日本語版集団自尊心尺度構成の試み. 社会心理学研究 10 (2), 104-113.
- 吉田達也 (2004) 自尊感情の変容に関する実践的研究. 生活体験学習研究 4, 55-61.

障害・疾病・不登校などのある児・者を対象にした
自尊感情・自己肯定感の文献検討

A Review on Self-Esteem and Self-Affirmation
in People with Disabilities and Disease

田 島 賢 侍*・奥 住 秀 之**

Kenji TAJIMA and Hideyuki OKUZUMI

発達障害分野

Abstract

This study reviewed “self-esteem” and “self-affirmation in people with disabilities and disease. In the 39 studies, 19 influence factors and 6 good approaches are identified. In the 21 studies, 7 influence factors and 7 approaches are confirmed. In conclusion, the studies for normal people tend to focus on the influence factors. On the contrary, the studies for people with disabilities, disease and truancy focus on both the factors and the approaches.

Key words: Self-esteem, Self-affirmation, Disabilities, Diseases

Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本論は、障害・疾病・不登校などのある児・者の自尊感情・自己肯定感に関する文献検討である。自尊感情・自己肯定感の影響要因について、健常者を対象とした論文で19要因、障害・疾病・不登校などを対象とした論文で7要因が確認された。一方、自尊感情・自己肯定感を高めるアプローチについては、健常者を対象とした論文では6点、障害・疾病・不登校を対象とした論文では7点が指摘された。健常者を対象とした論文では、自尊感情・自己肯定感の影響要因を特定する論文が多く、障害・疾病・不登校などを対象とした論文においては、影響要因と並行して高めるアプローチに関する研究が行われていることが示唆された。

キーワード: 自尊感情, 自己肯定感, 発達, 障害, 疾病, 不登校

* Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University/ Tokyo Metropolitan Jonan Special School for the Physically Handicapped

** Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)